

「個を開きつつ、新しい社会を構想することについて 「新しいアナキズム」を考える」

後藤彰信

はじめに

アナキストのイメージ (『中野重治詩集』から)

無政府主義者

僕らはある重大な演説を聴いていた

僕らはみんな熱心に聴いていた

ときどき僕らは激しい拍手を送った

そのとき僕らのそばに

髪の毛の長い一団の男がいて

まちがった言葉と卑しげな弥次とを止めどなく飛ばした

それらの言葉は

どこか一種の政治家に似

ごろつきに似

またどこか緑日の商人に似ていた

『中野重治詩集』 ナップ出版部 1931. 10. 5 p.78,9

『中野重治詩集』1980 筑摩書房 p.72

○ アナキストの「ならず者」性・「非科学性」の指弾

戦前のアナキズム運動が衰退して以降(1930年代前半)、拡散したイメージ

→ それでは、中野の理想とする革命家像とは

豪傑

むかし豪傑というものがいた

彼は書物をよみ

嘘をつかず

みなりを気にせず

わざをみがくために飯を食わなかった

うしろ指をさされると腹を切った

恥かしい心が生じると腹を切った

かいしやくは友達にしてもらった

彼は金をためるかわりにためなかつた
つらいというかわりに敵を殺した
恩を感じると胸のなかにたたんでおいて
あとでその人のために敵を殺した
いくらでも殺した
それからおのれも死んだ
生きのびたものはみな白髪しらがになつた
白髪はまつ白であつた
しわがふかく眉毛がながく
そして声がまだ遠くまで聞こえた
彼は心を鍛えるために自分の心臓をふいごにした
そして種族の重いひき臼をしづかにまわした
重いひき臼をしづかにまわし
そしてやがて死んだ
そして人は 死んだ豪傑を 天の星から見わけることができなかつた

『中野重治詩集』1980 筑摩書房 p.51,52

○ 豪傑について

理想とする革命家のありかたを日本の「歴史的伝統」から拾い上げようとする中野

・いささか講談本的ではあるが...

書物を好み、虚飾を排し、鍛錬して欲を抑え、名誉を重んじてよく身を処し、敵には容赦なく、老いても鍛錬を怠らず、「種族の重いひき臼をしづかにまわし」て死んだ。そして死んだ後も、名利を求めず、人々の記憶からも消えていった。

・「種族の重いひき臼をしづかにまわし」

—その生の所産として、歴史の推転のひとつの動力となる

・ニム・ウェールズ『アリランの歌』の主人公キム・サン（金山）の生

→ 「閉じた個」 —自らの理想を普段に内面化することに努める

—個としての弱さを徹底的に排除し

—自らの生を歴史の推転の一動力とすることで、その生を全うする（グランドセオリーへの自己同一化）

→ 社会変革の主体としていかに自己を陶冶していくか

人間観の深化（人間の生のさまざまな様相、強さも弱さも含めて、の把握）は問題とならない

いかにして「共産主義的人間像」の鋳型で自らを鋳直すかが問題

その際のさまざまな社会との軋轢や人間的葛藤のエピソード

→ プロレタリア文学として消費される

開かれた個を社会変革の主体とすることとは

1. 日本のアナキズムの系譜から

(1) 日本へのアナキズムの輸入史（平民社以前）

① 自由民権左派のロシアナロードニキ運動への共感（明治10年代後半）

クロポトキンについての言及

安東久治郎編『露国虚無党之由来』（1882. 9）

宮崎夢柳「虚無党実伝記鬼啾啾」（『自由燈』1884. 12～85. 5）

② 徳富蘇峰の民友社が発行する『国民之友』誌上でのアナキズムの紹介

（明治20年代後半）

平民主義を唱え、国民を主体とする近代化を志向、欧米社会主義の動向も紹介

③ 社会問題の発生（明治30年代）

— 社会主義・アナキズムはその解決策か、あるいは抑止すべきものか—

・『労働世界』誌上での社会主義紹介 主筆片山潜 労働組合期成会機関誌

・煙山専太郎『近世無政府主義』東京専門学校出版部（1902. 4）

出版の意図は、欧米のアナキズムの運動の実状を正確に紹介しこれに批判を加えること

④ 平民社以降、1920年代へ

幸徳秋水 1905年のサンフランシスコ大地震に遭遇 災害ユートピア

志士仁人意識とフランスサンジカリズムの行動的少数派の吻合

最新の革命思想の米国からの輸入 → 「科学主義」

大杉栄 「鎖工場」論（『近代思想』1-2 1913. 9. 1）の展開

労働者の資本家への隷属の要因を、単なる社会経済的なものとはせず、労働者自らが自らを縛り現社会制度に服従せしめる「鎖」を造り出し、自らをその「鎖」につなぎ、さらにその「鎖」を他者に次々に渡し、それぞれがそれぞれを自ら繫縛していくというイメージで説明。労働者階級の覚醒が、制度からの解放によってのみ達成されるのではなく、むしろ労働者自身の自律的な主体の回復によってこそ完成するという構図でとらえていた。

石川三四郎 人を善なる本性を持ちつつも、文明の発達の中かでその本性を曇らせ自ら「無明」に陥る存在と見た。そのうえで如何なる普遍的価値が成立可能か、そしてそれに如何にして近づくかという問を立て、観念的な形態においてはああるが、個を外在的規範で律し組織化するのではなく、個の自由なありかたに内在する規則性を見出すかたちでの統合理論を構想した。

2. 大杉・石川の主張と通底する「新しいアナキズム」とは

— 『アナキズムを読む』に、アナキズムとは何かを学ぶ—

(田中ひかる編『アナキズムを読む』皓星社 2021.11 181頁)

(1) 構成

序章 今、なぜ、アナキズムなのか 田中ひかる

1 アナキズムへの招待 ～自由な生に誘う言葉たち

2 極私的アナキズム入門 ～もう一つの生き方を探る

3 アナキズムの夜明け ～今に息づく思想の原点

4 アナキストの夢とその時代 ～戦前・戦中期の自由空間

5 戦後世界のアナキズム ～その思想と運動の軌跡

6 変革への道 ～世界と自分を変える方法

7 暮らしの中のアナキズム ～生活を変える小さな実践

終章 アナキズムの歴史と現在 田中ひかる

(2) アナキズムとは何かを、各章から拾う

① 編者による総括的定義

「アナーキー (anarchy)」すなわち「支配がない状態」を、理想的な人間関係や社会のあり方の一つであると捉え、その状態を作り出すために展開されるさまざまな思考や実践、態度 (attitude) を総称したものであり、アナキストとは、それらを実践する人々である」(田中ひかる 序章 今、なぜ、アナキズムなのか) p. 10

② 不定形なものとしてのアナキズムとそれへの接近方法

「アナキズムは本来、人間の社会習慣の中に、なかばうもれている状態で、人間の歴史とともに生きてきた……。習慣の中に無自覚の形である部分が大きく、自他に向かってははっきり言える部分は少ない。／だからこそ、明確な理念とその下に整えられた理論や綱領ではなく、そこからいつも漏れ落ちていくものとしての「個人のパーソナリティーであり、集団の人間関係であり、無意識の習慣をふくめての社会の伝統」のなかに、静かに探針を差し入れてやる必要がある。そこに潜むアナキズムの種子一力による強制を拒んでこれをふりほどく身振り、屈従を強いられた人びとの助けあいの気風ーを見分け、そのはたらきに従い、これを育てることがなければ、アナキズムの旗印は残っても、その実質は失われてしまうに違いない。」

(那須耕介) 鶴見俊輔『方法としてのアナキズム』p. 22, 3

③ 個のありかたと関係の結び方から説くアナキズム

「人間のやさしさを解き放つこと、それがアナーキーなのね。」

そのための「エンパワメント」(「人びとが交流するなかで、相互に内在している肯定的パワーに働きかけあ」う。)

さらに「エクスポージャー」(「本当の自分をさらけ出し、エクスポーズ」するという相互関係を作り上げていくことで、相互の信頼感を醸成できる)

→「戸田のアナキズムは、他者と関わる中で自己と他者を抑圧から解放することで実現する、愛と平和のアナキズムである。」

(田中ひかる) 戸田三三冬『平和学と歴史学ーアナキズムの可能性ー』p. 25

④ プリミティヴィズムとアナキズムーソローの日記と老子の通底

「この世界にありながら、自らの軸足を自然の中により深く置く人がいます。その結果、作為、人為、人間の思想に距離を取ることになります。社会的な大変革や市場

経済に距離を置いて、そのかたわらを静かに歩く人がいます。時代遅れに見えます。そうした人は今も昔もいました。おそらくこの人は昔からずっとどこにでも流れている、ある水脈に出会った人なのです。この水脈は名を与えようとする見えなくなります。名ではなくて、身体を使い、動き、感じるなかで共振する流れだからでしょう。この水脈は、遠いどこか他の場所にあるのではなく、私たちと地続きのところを流れています。」 (山口晃 ソローの日記を毎日読む) p. 79

⑤ アナキズムの不定形性への確信

「一人ひとりの人間がアナキズムについて考えたことがそれぞれアナキズムの内容である。あるいはアナキズムについて知らない人間の行為そのものがアナキズムでもあり得る。アナキズムとは自由になりたい、平等でありたい、他者を助けたいという希望の言説や行為の集合体である。」 (山口守) 大道寺将司『明の星を見上げて』p. 111

⑥ アナキズム思想における身体性の問題 その1

「アナキズムとはまさに実践経験のなかにおいてのみ育まれる思想であり、体系的な理念が瓦解し、不透明な未来に向けて手探りで進まざるを得ない今だからこそ、さまざまな社会運動の実践理念として再生されているのです。」

(木下ちがや) ノーム・チョムスキー『チョムスキーの「アナキズム論」』p. 117

⑦ アナキズム思想における身体性の問題 その2 一人類学から

「アナキズムは仕事を減らして人生を楽しむことを目標とする思想」、「これに対して資本主義は、人びとが長時間労働に従事することでひたすら経済を拡大することで成立し、しかも、働き過ぎを支えるためにさらに無数の仕事が生まれている。」

(田中ひかる) デヴィッド・グレーバー『アナキスト人類学のための断章』p. 119

⑧ アナキズム思想における身体性の問題 その3 戦闘的なフェミニズムの視点

「フェミニズムが闘争の最前線をなす。数々の差異と交差しながら世界各地で興隆するフェミニズムの運動は、家庭はもとより、国家こそが家父長制そのものであると指摘する。とすれば、いっさいの国家・権威を拒否するアナキズムは、フェミニズムへと生成しなければならない。家父長制を解体しなければ、脱国家化する社会はありえ

ない。」 (北川眞也) クナップ・フラッハ・アイボーア編『女たちの中東ロジャヴァの革命』p. 124

おわりに アナキズムとは何かについて考えた

- 「新しいアナキズム」論の展開の背景とは何か
 - ・社会運動のオーソドクシーというべきものの解体
 - ・「今・ここで」、自分たちの理想を実現しようとする人びと」が1990年代以降現れたこと (田中ひかる)

この二つは、連続している。社会運動のオーソドクシーというものが消滅したことで、アナキズムは社会変革運動の他の潮流と戦うことでも自己形成してきたものではあったが、今やその径路は消滅した。人びとが「今・ここで」自分たちの理想を実現することに何らの思想的制約がなくなったと同時に、新しいアナキズムの実践が始まったのである。とすれば、「今・ここで」自分たちの理想を実現することをめざす人びとからも、アナキズムとは何かを学ぶことも出来るわけであり、それこそがむしろ今日的に重要となってきたのである。

- アナキズムであることを決定づけるものとは何か。

＝開かれた個のありかたとその開き方の問題

理想的な個のありかたと他者との開かれた関係から、社会のあるべき姿を構想する方法こそが、アナキズムの本質ではないか。

田中は、緒方正人が水俣病事件に取り組むなかで到達した「加害者たちの責任を問う水俣病」から、また自分の「人間の責任」問われる水俣病への認識の「どんでん返し」から、「がんじがらめの世の中で人間が解放される可能性」を、患者や組織の一員から「個」に戻り、さらに「人間」を「創造」していくことに見出したことを引く。(緒方『チツソは私であったー水俣病の思想』) まさに、これであろう。

グランドセオリーから、個と社会のありかたが演繹される社会変革ではない(そこでは、個のありかたは閉じてしまっている)。つまりは、自律した主体形成の提起なのである。生活主体であり、同時に倫理形成主体でもある開かれた個をいかに立たしめるかという課題である。国民国家の枠組みのなかで馴致されるのではなく、「今・ここで」自分たちの理想を実現することをめざす人びとから、アナキズムとは何かを知ることができた。

緒方正人『チッソは私であった—水俣病の思想—』（河出文庫版 2020. 12） p. 10, 1 より

言葉にすればたった三文字の水俣病に、人々は恐れおののき、逃げ隠れし、狂わされて引き裂かれ、底知れぬ深い人間苦を味わうことになった。そこには、加害者と被害者のみならず、「人間とその社会総体の本質があますところなく暴露された」と考えている。つまり「人間とは何か」という存在の根本、その意味を問いとして突きつけてきたのである。

私自身、その問いに打ちのめされて八五年に狂ったのである。それは、「責任主体として人間が、チッソにも政治、行政、社会のどこにもいない」ということであった。そこにあったのは、システムとしてのチッソ、政治行政、社会にすぎなかった。

それは、更に転じて、「私という存在の理由、絶対的根拠のなさ」を暴露したのである。立場を入れ替えてみれば、私もまた欲望の価値構造の中で同じことをしたのではないか、というかつてない逆転の戦慄に、私は奈落の底に突き落とされるような衝撃を覚え狂った。

一体この自分とは何者か。どこから来てどこへゆくのか、である。それまでの、加害者たちの責任を問う水俣病から自らの「人間の責任」が問われる水俣病へのどんでん返しが起きた。そのとき初めて、「私もまたもう一人のチッソであった」ことを自らに認めたのである。それは同時に、水俣病の怨念から解き放たれた瞬間でもあった。

緒方正人『チッソは私であった—水俣病の思想—』（河出文庫版 2020. 12） p. 75, 6 より

水俣病事件の責任が、非常にあいまいなまま処理されようとしている動きの中で、患者それぞれにとっても、どこかで一度、ひとりの人間としての「個」に帰るということが今、必要な気がします。ある意味で組織化されてきた患者が、その組織の中の、たとえば「原告番号何番さん」「原告代表誰々以下何名」というのではなくて、「個」に帰るということが一番大事なのではないか。その中から、この水俣病事件を軸にして時代をどう見てきたか、自分自身の救いをどこに思ってきたのか、という自問自答をしなければならないと思っています。

緒形正人（1953年生まれ）熊本県芦北町生まれ 網元の子 中学卒業後家業を継ぐ

父とともに水俣病を発症 水俣病の未認定運動に身を投じる。のち訴訟から離脱。

石牟礼道子らとともに「本願の会」を発足させ、独自の活動を展開。